

慶応大先端生命科学研究所所長

とみ た まさる
富田 勝氏



米カーネギー・メロン大准教授などを経て、1990年の慶大湘南藤沢キャンパス開設時に環境情報学部助教授に就任、97年から教授。2005～07年に同学部長。54歳。

東大が導入を目指す「秋入学制度」は、20年以上前から慶応大学の湘南藤沢キャンパス(SFC)ですでに導入している。この秋入学者は、まだまだ少数ではあるが、今後社会のグローバル化に合わせて着実に割合が増えていくものと期待している。

も、学年による履修制限がほとんどないため、学生は春学期と秋学期どちらでも入学が可能であり、春に入学して秋に卒業したり、秋に入学して春に卒業することもできる。昨年からは、英語だけの講義で卒業できるプログラムも、学部段階で新しくスタートした。留学生も含めて学生は各自の希望やニーズに合わせて学び方を選択できるわけだ。この制度はともよく機能していると思う。最近では他大学でも、特に、大学院課程で、入学時期のごくした春秋複線化を推し進めているところも少なくない。

これに対し、今回の東大の提案は、春入学を廃止して秋入学に一本化しようというものである。これでは学生にとって選択の余地がない。

3月に卒業した場合、9月に海外で入学するまでの半年間が、現地で語学力を鍛える貴重な期間になるかもしれない。同様なことは日本に来る留学生にも言えるだろう。つまり春と秋入学の両方の選択肢を残しておくことが個々の学生にとっては非常に重要なことなのだと思う。

ではなぜ東大は、春入学と

「春」「秋」の選択肢 必要

秋入学の複線化の道を選ぶに秋入学への全面移行にこだわらうか。今回、東大の秋入学に関する考え方を示した入学時期の在り方に関する懇談会の「中間まとめ」には、次のような記述がある。

「学部教育の性質・実情を踏まえると、入学時期さらには教育課程を複線化しようとすることは、相当のコストを要し、困難が多い。限られた人的・物的資源によって教育の質を維持・向上させていく観点からは、全面移行がより合理的であると考えられる」

つまり、複線化せずに全面移行する理由は、内部の人的コストなどの台所事情によるもの、ということになる。

ただ、「困難が多い」とあきらめず、真に学生のため社会のためにどうあるべきかを考えてみてはどうだろうか。

さらに、高校を春卒業して大学に秋入学するまでの半年間の「ギャップ」の意義については、「多様な体験を通じ、受験競争の中で染み付いた点数至上の意識・価値観をリセットし、学びに取り組み姿勢を転換させるため」とある。

ならば、点数至上の入試のあり方を根本的に改革するのが筋だろう。多様な体験機会が必要なのはむしろ中学・高校時代であり、それを阻害しているのが一点刻みの受験競争ではないだろうか。

「みんながやらないなら、やらない」とか「みんながやるなら、うちもやる」という護送船団的な考えは捨て、学生のことを第一に思い、各校の理念と信念に基づいて独自に判断すべきである。(寄稿)